

電気新聞 連載

時評「ウェーブ」 第五回

会社の命にかかわること

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 第五回 会社の命にかかわること

人口減少を目前に「労働人口が減るから困る」と騒ぐ財界人が多い。可能労働人口の大半を無駄にして何を言うのかと、呆れる。硝子の天井や差別待遇に何人の女性が働く意志をなくしたのか。女だから言うのではない。理由は、*It's good for business!* 強いて訳せば「会社の命にかかわる」。

世界銀行職員組合で女性問題を担当していた頃、世に先駆けて女性進出を促進したカナダの某銀行総裁に会う機会があり、動機を尋ねた。彼の答えは簡単明瞭。「顧客の半分以上が女性だ。男の視点だけでは、顧客のニーズを把握できない。金融サービス業の命にかかわることだと、腹の底から信じたから」

世銀も同じとピンときた。吉田松蔭の言葉を借りれば、母は「百万人の教師に勝る」。だから女性は次世代を変える。女の視点を欠く仕事は、非援助国民の半数どころか大半を見逃す。中途半端な融資は、いつか世銀を駄目にする。

男所帯のパキスタン現地事務所に女性をと、所長を説得した時もそう言った。すぐ動いてくれた方がいいが結果が出ない。「技術系の応募資格を持つ女性が少ない」。「回教国だから難しい」。数々の理由は至極もつともで、これは時間がかかるぞと覚悟した。

大間違いと気付いたきっかけはアフガニスタンとの国境付近を視察中起きた、小さな「事件」。パーダ（イスラム原理主義社会に見られる女性外出禁止等の慣習）に従う村に入った時。世銀融資の結果報告にと輪座して、青空会議を開いてくれた村人は、風船のようなターバンを頭に、カラシニコフ自動小銃を無造作に抱えていた。会を終え、礼の挨拶に立ち上がったら、子供数人が「おばさん」と駆け寄って来た。銅色に焼けた男衆の顔がほころんだ。ふと思ひ立ち「お父さんは、あなたたちのために汗を流して」と村の団結を褒め讃え「父を見習え」と教えた。

顔をくしゃくしゃにして喜んだ村長が、「家に来てくれ、妻と娘を紹介したい」と誘う。同行の所長と職員らが一瞬ひるんだ。女衆は土壁の要塞に守られた民

家に潜む。会うことは、紅一点の私にしか許されないからだ。

外界から遮断された中庭での半日、目から剥がれ落ちた鱗は数えきれない。「娘を就学させたいが女子の徒歩通学は危険な土地。世銀はなぜスクールバスを贅沢と言う」と叱る村長夫人。「妻にも読み書きを学ばせたい」と夢見る村長。男尊女卑のパーダの村は女子教育を嫌うというのが、専門家の定説だった。鵜呑みにしていた自分が、恥ずかしかった。

日が西に傾く頃、門を出た私を迎える男性群の顔はまっ青。「諸君のボスは女性失格！」と笑わせた。ボスが学んだ教えの数々に、目を丸くして聞き入ってくれた。

あの銀行総裁の最も大切な言葉を、聞き逃していた。「腹の底から信じた」ら、情熱という名の力が湧く。「事件」を知った。パ事務所が、総ぐるみ熱くなった。「僕らの恥。世銀が危ない」。

現地職員の情熱が、新しい方法をあみ出した。応募資格のある女性は確かに少ないから、待っただけ損。候補者探しを積極にと言う彼らに、地球単位でと助言した。「海外で活躍する。パ女性は多い。『世銀』なら帰国を考えるはず」。

しかし、喜び勇む部下に待ったをかけた。「いくら有望な候補者を発掘しても、女性優先採用は禁止する」。喧々囂々の議論の末、男女双方の差別になると、納得してくれた。「無意識差別がないように、面接員は男女半々」。「一般職員も面接員に入れて、透明性を高めよう」。次々と出る斬新的な意見に、一同奮い立った。

差別を克服した人材は、選考トップになる確率が高い。続々と入る女性職員を歓ぶ日。その日はあつという間に到来した。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇八年八月一八日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。